

書評 BOOK REVIEW

『マイナーエマージェンシー』

(Philip M. Buttaravoli 著, 大滝純司 監訳)



- B5版, 764頁
- 定価 14,700円
- 医歯薬出版

「マイナーエマージェンシー」はわが国ではほとんど馴染みのない言葉ではないだろうか。救急医の端くれである評者も日常的に口に出すこともなく、「耳に虫が入った時の処置」「釣り針が刺さった場合」「爪下血腫の処置」といった Tips や裏わぎのことかと思っていた。ところが監訳者の大滝純司教授もふれていて、原著の序を記した北米 ER の大権威 P・ローゼン教授が解説するように「軽症とされる問題を詳しく取りあげ、鑑別の手がかりと経験に基づく治療の秘訣を語る」ものである。かくれている重大な疾患を否定して、あまり時間と費用をかけずに治療するガイドブックである。

わが国では類書がないマイナーエマージェンシー [実は月刊誌の特集が最近取りあげていた (JIM, 19 巻 8 号)] は「臨床像」「すべきこと」「してはいけないこと」「考察」の順に執筆されている。第一部精神・神経科の領域に分類されている「頭痛」についてみると、片頭痛(事例 6)と緊張性頭痛(事例 9)では教科書的な一次性頭痛の記載に混じって前者が軽い運動で誘発されること、朝方の痛みによる覚醒、後者が 1 日の終わり近くやストレスの多い行事のあとに発症するという病歴を強調している。「すべきこと」として片頭痛では 4% のリドカインの点鼻(片側)投与や硫酸マ

グネシウム 1g の静注、緊張性頭痛ではトリガーポイント注射をすすめて詳細に手技が解説されている。もちろん EBM にも配慮して、参考文献やエビデンスのある研究がないことにもふれているところがすごい。「してはいけないこと」にも救急受診後の適切なフォローが得られない場合に「トリプタン製剤」を処方してはいけないとクギを刺してある、といった具合だ。

眼、耳、鼻、皮膚、泌尿器はもちろん、筋骨格、軟部領域だけで全体の 3 分の 1、急性気管支炎、伝染性単核球症、便秘、下痢、嘔吐といった内科系の病気にまで記述が及んでいる。まさに、夜間急患センターに自力でやってくるありふれた病気のオンパレードである。なかでもありふれていて多くは軽症である嘔吐を伴う食中毒の記述は実践的で、かつ公正である。「すべきこと」として AMI や腹膜炎といった重篤疾患と急性虫垂炎の除外を常に念頭におき、若年患者では 1~2l の細胞外液を 1 時間で注入して、高齢者では心血管、腎のリスクを疑い慎重に投与する。軽症例に制吐剤はコストも高く不要だが、嘔吐が激しい場合はプリンペランを静注して副作用予防にポララミンを併用する。低用量ハロペリドール 2mg 静注もすすめている。1~2 時間で症状が改善して帰宅するにあたり、帰宅後に経口水分補給を開始して、24 時間で食事に戻るように指示する。「してはいけないこと」として食中毒の原因を安易に推定することを慎む、尿量を監視しないで輸液不十分とならない、軽症な健常例に高価な臨床検査は不要である。「考察」には急性胃腸炎の原因菌について記述してある。引用されているエビデンスも 2002~2005 年と比較的新しい。

翻訳にあたられた先生方が、バリバリの救急医でなく、救急に強い総合診療領域の優秀な若手グループであることも本書の信頼度を高めている。自らこのような患者群を前に診療する研修医だけでなく彼らを指導している上級医にとっても、バイブルになるテキストである。是非とも施設に 1 冊用意したい。

(聖マリアンナ医科大学救急医学・

臨床研修センター、箕輪良行/みのわよしゆき)